資料紹介

乱歩旧蔵『雉鼎会談』について

近衛典子

昨年十月に国書刊行会より〈江戸怪談文芸名作選〉シリーズ第四巻『動物怪談集』を校訂代表として上梓した。私が担当したのは藤貞陸なる人物によって著された、宝暦五年（一七五五）刊の読本『〈中古雑話〉雉鼎会談』（五巻五冊）である。校訂に当たり、最善本である貴センターご所蔵の乱歩旧蔵本を底本とさせていただいた（登録番号52071238～52071242）。また閲覧、及び挿絵の写真撮影に当たっては、貴センターの丹羽みさと先生に多大なるご尽力を賜った。心より感謝申し上げる。

作品は全九話で、巻一から巻四までは各巻二話、巻五のみ一話を収める。作品冒頭の「発端」によれば本作は、貞享年中（一六八四～一六八八）のある年九月二十六日、武蔵野誓願寺で月待ちをしていた作者が、隣室から聞こえてきた三人の武士の語る怪談に興味を覚えて書き留めたものであるという。

『動物怪談集』に収録したことでわかるように動物に関わる話が多いが、この作品の特徴はそれだけではない。その体裁を見れば、巻四までの各タイトルは、他に類例を見ない整然とした構成となっている。すなわち、巻一が「鼠を愛して道徳を失ふ」・「蘭を夢みて美女を産む」、巻二が「嵯峨野の俳仙」・「武蔵野の神童」、巻三が「男、女に変ず」・「女、夫を嚙ふ」、巻四が「猿の怨、猴の情け」・「蜂の楽しみ、蜂の患へ」と、各巻とも二話のタイトルが見事に対になっているのである。そして、最後の巻五のみ、「義死孝女」という長編で締め括られている。

また話の内容も、笛の名手である若者がその音色に惹かれて現れた女（靫の化身）と契った後、姿が女に変じてしまった話（巻三－一）や、神の使いである猿を捕らえた兄が天罰により猿の姿となるが、兄の失踪に胸を痛めつつも幸せを掴んだ心優しい妹のお蔭で元の姿に戻る話（巻四－一）、愛する男の敵討ちの相手が実の父であると知った女が、自ら身代わりとなって男に討たれるという、袈裟御前を思わせる話（巻五）など、ユニークで、かつバラエティに富み、読者を飽きさせない。水谷不倒『選択古書解題』（一九三七年）によって紹介されて以来、これまで光が当たらなかったのが不思議なくらいである。

作者の藤貞陸の事績については従来、ほとんど不明であった。ところが今回調査した結果、貞陸は藤田氏、江戸に住し、八百屋お七の手習いの師匠であったという伝承を持つ人物で、後年、川越藩主秋元氏に仕えた貞門俳人であるらしいことが判明した。貞陸については現在なお調査を継続しているが、百才の齢を保ち、延享三年（一七四六）七月に没したといい、墓も川越市の大蓮寺に現存する。

本作の成立についても未だ課題が残る。群牛の序文によれば、本書は貞陸の遺著を群牛が発掘し、校訂を加えて出版したものであるという。しかし、本書を江戸時代の怪談史の中に位置づけようとする場合、寛延二年（一七四九）刊行の都賀庭鐘『英草紙』との影響関係は無視できないのである。貞陸と群牛との関係なども含め、様々な方面からのアプローチが必要で、まだまだ興味は尽きない。

このように、『雉鼎会談』はこれまで注目を集めてこなかったが、その内容の奇抜さと言い体裁の工夫と言い、隠れた怪談の名作の一つと言ってもいいように思われる。この無名の書を乱歩が所蔵し、目を通していたであろうことを思うと、その読書の幅の広さに驚き入るばかりである。

乱歩は一体、この書のどの話に最も関心を持ったであろうか、などと考えながら読み進めていくのも、また楽しいことである。

近衛　典子